

生命と非生命を超えるエコゾフィーと平和

Ecosophy and Peace Beyond Life and Non-Life

四方 幸子（キュレーター／多摩美術大学・東京造形大学客員教授）

Yukiko Shikata (Curator / Visiting Professor of Tama Art University and Tokyo Zokei University)

概要

本発表は、本シンポジウム開催年（2021）に生誕100年を迎えたドイツのアーティスト、ヨーゼフ・ボイスがエネルギーの流動による「トランスフォーメーション」を誘発するため動植物や鉱物などを含む自然物との交歓を行なったことに触発され、各時代の科学・技術や社会の動向を踏まえながら「情報フロー」という世界観を基盤にキュレーションを行う四方の21世紀における生命観を提示するものとなった。ポストパンデミックの時代に入り、生涯テーマとして「人間と非人間のためのエコゾフィー¹と平和」を掲げながら、自然・社会・精神のエコロジーをデジタル技術を介し包摂することで未来の創造的社会へ向かうこと。ここでの「平和」は、環世界（ユクスキュル）を生きる各存在のエネルギーや欲動を相互依存的な創発へと促すことであり、エコゾフィーも平和も人間以外へと延長されうる。1990年代初頭から、自己／非自己、人間／非人間、生命／非生命、可視／不可視などの境界を問うプロジェクトに注目してきた者として、当時の重要なプロジェクトと位置づけるMMMの「SKIN」²を、また合成生物学そして新人世やポストパンデミックの時代となった現代における、新たなエコロジーの兆しを「“生命と非生命を超える”エコゾフィーと平和」というテーマでいくつかの事例とともに検討した。シンポジウムを経て、またその前後の自身のフィールドワーク（山々や石のリサーチ）や思考の中から、ミクロやマクロの時間や空間スケールを貫き諸現象の背後に通底する情報のプロセスとして「生命」や「生命観」をあらためて見直す視座を、とりわけ「パフォーマティビティ」の側面から強めることができた。それはマルチスピーシーズ人類学とも通じるものであり、デジタル上

の存在も含めた「モア・ザン・ヒューマン」的な生命を示唆するものでもある。

I. 情報フローとしての世界

「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」。ポール・ゴーギャンが19世紀末に発したこの言葉は、現代の私たちにも大きな問いとしてある。そして筆者は「我々は何をしているのか、何故、何のために…？」と問いかける。21世紀の科学・技術の発展が、それまで自明であるとされていた「リアリティ」や「人間」「生命」などという概念の見直しを迫っている。同時にその事態を引き起こしたのは人間である。今世紀には「人新世」という地層年代が動植物を含む地球環境や宇宙にまで影響を及ぼすものとして認識されたが、それも人間によるものである。環境汚染や気候変動、2019年に現れた新型コロナウイルスによる感染症、2022年2月に起きたロシアによるウクライナ侵攻…様々な側面で近代の人間中心主義がほつれを見せはじめている。

科学・技術の分野、とりわけ生命科学や宇宙科学、情報科学においては個体としての人間像が、ミクロ／マクロのスケール、そして様々な存在との関係の中で解体されてきた。素粒子物理学者の村山斉は「私たちの体は超新星爆発の星くずでできている」と述べているが³、まさに私たちの身体を含め、この世界のあらゆるものは宇宙に由来する。村山は、ウロボロスの蛇の図を示し、頭部（銀河）から尾部（素粒子）までをマクロからミクロへのスケールとして提示、その間に人間が知覚可能なメゾスコピックな世界が挟まれている。蛇の内部には、科学の諸分野を頭部（宇宙論）から尾部（素粒子物理学）までとし、その間に地質学、生物学、化学などが間を線

で仕切られている。そして頭（マクロ）が尾（ミクロ）を呑む部分で、宇宙論と素粒子物理学の間が点線で仕切られている。極度に異なるスケールがつながるシステムを示唆するかのよう。

世界はエネルギーの流動、つまり情報のフローに因っているのではないか。現存するものは、生命や非生命、物や現象も含め、宇宙のビッグバンから派生して過去から未来へと連なるプロセスの只中にある。すべての物や現象が生成・流動・変異してきた中に、私たち人間も含まれる。地球においても物理・化学的反応が常に連鎖するプロセスで生々流転—気象や地殻の変動、海流や動植物の移動、生物のホメオスタシス—が起きている。

II. 「生命」とは？

筆者は、元々ドイツのアーティスト、ヨーゼフ・ボイス（1921～1986）との出会いを端緒に1980年代から現在に至り活動が続けている。ボイスは自然科学・人文科学を横断しながら「人は誰もが芸術家である」「社会彫刻」などを表明し、美術を社会の領域へと拡張しようとした。脂肪や蜜蝋、フェルト、銅、鉄などをメディアとし、ドローイングや彫刻、インスタレーション、パフォーマンスなど多様な表現に加え、人々との対話を重視したが、そこでは様々なエネルギーの流動による「変容」^{トランスフォーメーション}が志向されていた。

2021年に筆者はボイスの生誕100年記念としてオンライン・フォーラム「精神というエネルギー | 石・水・森・人」を企画、長野県茅野市に新たに開設された『対話と創造の森』よりライブ配信⁴を行なった（11月6日）。タイトルの通り、石や水、森や人が相互依存的で不可分なものであることを自然の懷において話し合う場である。ここでの「精神」とは森羅万象、そして情報のフロー、つまり絶えず変化・循環し続ける動態を指している。ここでは物質と精神を分けず、情報のフローが物質と非物質や可視と不可視、そして生命と非生命の境界をつなぐものとしてある。

石、水、森、人をいずれも「生きている」ものであり、フラットで相互依存的な関係性にあるとみなすこと。それは「生命」近代的な拘束から解放し、現象そのものと向き合っていく脱人間中心的世界観に根ざしている。かつて三木成夫は、「生命」とは生活の中にではなく、森

羅万象の“すがたかたち”の中に宿るものである、と述べた。それに遡りアンリ・ベルクソンは、「生きているものは全て意識を持ちうる。すなわち原理的には、意識は生命と同じだけの広がりをもつ」としている。

諏訪・八ヶ岳地域には数多くの磐座^{いわくら}が存在するが、『対話の創造の森』の中にも苔むした磐座が複数鎮座する。ボイスは晩年「7,000本のオーク」（1982-1987）でオークの木と玄武岩の一对を7,000セットが購入によって植林される仕組みを環境プロジェクトとして先験的に提示している。成長するオークと玄武岩の組み合わせは、生と死の対比にも見えるが、ボイスは火山からの溶岩が急速に冷やされた玄武岩に動的なものを読み取ってもいる⁵。つまり樹と石が、いずれも生きたものとして長い年月のうちに絡まり合うことが想定されている。筆者が諏訪・八ヶ岳で出会った磐座の中で、たとえば霧ヶ峰高原の八島湿原にある磐座（奥霧ヶ峰^{みさやま}旧御射山神社参道入口）が、まさにそのような様態となっており、「7,000本のオーク」の未来を彷彿させた。

石を見ると、現在のかたちに至るまでの何億何万年の時間における生成変化を想像する。石は鉱物や有機物など多様な素材からできているが、それぞれが地層、地殻変動、気候、経年などによる物理・化学変化の履歴を宿したタイムカプセルといえる。異なる小石が混じったり、圧力や熱で凝縮・変化する中で「育つ」ものもある。同時に石は、微生物や菌類を始め様々な生命体を宿している。

「石が生きている、石が太る、石が血を流す…」⁶。梶山林継のこの言葉は一見神秘的に聞こえるが、微生物らとひとつの生態系を形成している側面からみればうなづける。奥野克巳は、ティム・インゴルドが『人類学とは何か』のなかで、人類学者A・ハロウェルとカナダの先住民族オジブワの首長ベレンズとの間で1930年代に行われた「石」をめぐる対話を検討している。ベレンズの語りを検討し、インゴルドは以下のように述べている。

「いのちが石の中にあるということではなく。むしろ、石がいのちの中にあるのだ。人類学では、モノの存在および生成についてのこのような理解—もしそう呼んでいいのなら、この存在論—はアニミズムとして知られている」（ティム・インゴルド）⁷

インゴルドは、「いのち」を「世界を貫いて流れる物質の循環とエネルギーの流れの见えない力」としたが、そこから私は「情報フロー」を想起する。インゴルドはまた、人類学における存在論として「アニミズム」という言葉を使っているが、人間と非人間（動植物や石だけでなく、気象や自然の諸現象、デジタル上の存在も含めた）が連携していくプロセスを含めた新たな存在論やアニミズムが編まれていく必要があるように思われる。

それは、かつて今西錦司が述べた「すなわち相異に着眼するならば人間、動物、植物、無生物というごときものはそれぞれ異なったものであろう。しかしまたその共通点に着眼したならば、人間、動物、植物、無生物はすべてこれこの世界の構成要素であり、同じ存立原理によってこの世界に存在するものであるということができ」⁸にも通じるだろう。

ジェスパー・ホフマイヤーは「生き物それ自体がメッセージである」と述べた⁹。そしてホフマイヤーが参照するパースは、精神を推論の法則にしたがって徐々に展開していくひとつの記号であるとした。近年においてパースの記号論は、エドゥワルド・コーンの「記号は精神に由来しない。むしろ逆である。私たちが精神あるいは自己と呼んでいるものは、記号過程から生じる」¹⁰という言葉に代表されるようにマルチスピース人文学と接近し、同時代的な知見を生み出しは始めている。

III. バイオアートと日本：筆者のキュレーションから

バイオアートの問題系は、筆者においては1980年代末に遡る。鮎屋法水が東京グランギニョル後結成したM.M.M.による演劇パフォーマンス『SKIN』（1988-89）で、ポストサイバーパンク的な世界観で当時の生命科学やコンピュータを介したアイデンティティを照射する本作が、人間／非人間の境界（動植物、微生物、モノ、ロボット、AI…）について検討する出発点となった。

1990年代に米国のクリティカル・アート・アンサンブルが、バイオテクノロジーにおける生政治の問題をインスタレーション、パフォーマンス、出版¹¹など多岐にわたる活動で扱ってきたことも念頭にある。

1998年には、ハンガリーの若手プログラマーやハッカーによるEastEdge「tyrell.hungary」（資生堂CyG-net¹²）をキュレーション、顧客が希望通りのレプリカ

ントをオーダーできる企業サイトという設定（現代のデザイナー・ベイビーを彷彿させる）とともにバイオテクノロジーと人間の欲望について挑発的な視座を提供した。21世紀を前に、フランシス・フクヤマは以下の言葉を発している。「我々は「人間後（ポストヒューマン）」の未来に足を踏み入れようとしているのかもしれない」¹³。

筆者は同時に2000年より、デジタル／アナログを問わず環境データの観測と可視化・可聴化についてのキュレーションに取り組んできた。カールステン・ニコライ＋マルコ・ペリハン「polar」（2000）¹⁴、「ミッションG：地球を知覚せよ！」展¹⁵、そして2010年には10年前の「polar」の次のヴァージョンとして「polar m [ポーラーエム]」を同じアーティストとキュレーターで実現している¹⁶。

2005年には合成生物学の時代を反映するプロジェクト、福原志保＋ゲオアグ・トレメル（現：BCL）の「バイオペレンス」（2003-）を紹介した。「生きている記念碑」¹⁷として人間の遺伝子を木に保存するプロジェクトで現代のバイオテクノロジーの発展により社会が直面する諸問題を問いかける批評的なものである。

茨城県北芸術祭2016¹⁸では、発酵産業が盛んな常陸太田市でバイオアートのプロジェクトをまとめて紹介、従来のラボから離れて自然や地域の風土や日本の精神性に根ざした観点から生命を検討する場とした。

三原聡一郎は、東日本大震災以降「空白のプロジェクト（blank project）」シリーズをエフェメラルなメディア（音、泡、放射線、微生物、苔、気流、土、電子、水…）を介して展開してきた。茨城県北芸術祭2016では、微生物燃料電池で苔玉を動かそうとするプロジェクトを披露、SymbioticA（オーストラリア・パース）のオロン・カツとイオナ・ズールは、蜜蜂の専門家マイク・ビアンコと組んでコンポストを使った蜂の孵化器を、BCLはDNAフォールディング（折り紙）の記憶装置として、折り鶴の形に折った地元の和紙を活用した展示を行った。

とりわけ日本特有の生命観を浮き彫りにしたのが岩崎秀雄＋metaPhorestの「aPrayer まだ見ぬ つくられしものたちの慰霊」¹⁹である。「人工生命や人工細胞、発酵微生物は「慰霊」に値する（生命と見なされる）のか？」という問いのもと、動物やモノなど人間以外の慰霊や供

養を行う日本の事例の研究や人工生命・細胞研究者や地元の発酵関係者、地質学者や石材業者に綿密な取材を敢行、成果をインスタレーションとして発表した。そのなかで、「石」が生命との関係で大きく浮上し、地元の人々の協力で地域ならではの蛇紋岩を使った「人工生命・人工細胞」と「発酵微生物」の慰霊碑が作られ恒久設置されるという想定外の展開に至ったことも付記しておく。

IV. 三原聡一郎：空気の芸術

三原聡一郎は10年ほど前からコンポストを行ってきたが、アーティストとしての滞在先で地元の人々の協力を得てプロジェクトとして展開し始めたのはここ数年のことである。コンポストを通じて、生命、生活や土地とアートの営みがつながり始めたといえる。また2021年から「土をつくる」²⁰を開始、自動で回転し空気を取り込む自作のコンポスト装置を自宅に設置、24時間365日ストーリーミングするプロジェクトとして生きている限り続けるという。食材をコンポストと分け合い、微生物とコラボレーションした堆肥を使った生命の循環であり、自らを介した食物連鎖の実践でもある。日々コンポストと「対話」することで、自身とコンポストのただならぬ関係（親密さやつながり）とともに、生と死、人間と土、人間と微生物など生物学や哲学をまたぐ思考が発酵し続けている。

三原とは2018年に福島第一原子力発電所構内に入り、2021年には中間貯蔵施設²¹（福島県大熊町）を訪れている（いずれも三原が視察を企画）。後者は広大な敷地にクレーンで汚染土という負の遺産が埋め立てられる光景が遺跡の発掘現場のようにも見え、「逆遺跡」（四方）という言葉がよぎった。

白川静は、日本語の「つち」が土一般をさすのではなく、地中に潜む霊的なものの呼び名だったと述べている。土といえば、「人は土から生まれ、土に還る」という言い方があるが、人類は、水や土から生まれた動植物の摂取によって生まれ、生き、歴史の長い期間において、死ぬと土葬や風葬によって自然に還るものだった。土は、微生物や動植物、ミネラルの宝庫であり、様々なものを育む豊穡な母体で、人間もその一部である。そこに日本人は霊性を感じてきたのではないか（それを否定したの

は、明治時代以降である）。

「人間（human）」の語源は、「腐食土：(humus)」や「堆肥（compost）」であるという。近代は、人間を自然や土から切り離したが、それは人間を自然の循環から疎外することになった。現在哲学や人類学において、ダナ・ハラウェイ、ティム・インゴルド、エドゥワルド・コーンやアナ・チンを始めとする多くの学者が、人間と人間以外（動植物、微生物、石や森……）などとのハイブリッド化や共生について語っていることと、人新世とはシンクロしている。

三原は、2021年秋に描いたスケッチ（試論）「空気の芸術 ダイアグラム」において、彼がこれまで行ってきた試みや作品が「空気」という傘のなかに抱合されると気づいたという²²。

「空気というのは、何もないのではなくて、さまざまな情報（成分、流れ、気圧、湿度、電磁波……）が充満している。そこでは異なる流れが関係し、時には合流し分岐しながら強度を変えて移動している。螺旋の動きは、台風や竜巻ほど大規模でなくても至る所で起きている。自分の呼吸やふとした動作でも空気が動き、周囲のものに影響を与えていく。自然界に見られる動きや現象は、太古から現在、現在から未来へと、時間と空間を超えてつながって見えてくる」²³（四方、2021）

「我々はみなコンポストなのであって、ポスト-ヒューマンであるわけではない」²⁴（ハラウェイ、D., 2017）

「地層も、土や泥を5億年かけて堆積した生き物の死骸と考えると、生物が鉱物や泥になって地層をつくったり、反対に地層から生き物が生まれたりという循環が見えてくる。バイオス（生命）とジオス（地球）のレベルは互いに連動していて、その上で初めて人類は生きられる」²⁵（石倉、2020）

V. 生命と非生命を超えるエコゾフィーと平和

最後にミクロやマクロの時間や空間スケールを貫き様々な現象の背後に通底する情報のプロセスから「生命」や「生命観」をあらためて見直す視座を、とりわけ「パフォーマティビティ」の側面から検討してみたい。

はじめも終わりもない、人類が生まれる前から継続している悠久のサイクルを、パフォーマンスやパフォーマンスティビティ（行為遂行性）とみなすことができないだろうか。人間や生物以外、たとえば風の流れや空気の動きなど、地球を取り巻く環境や生体内の動きも含めて「パフォーマンス」ということはできないだろうか。

デジタルネットワークが張り巡らされ、科学・技術がSFを凌駕するほど進んだ現在、バイオアートにおける細胞培養や異種のハイブリッド化におけるパフォーマンスティビティに加え、専門に閉じずアーティストが実験し、倫理・哲学的側面から問題提起をすることもパフォーマンスティビティとみなしえないか。

時間軸をもつメディアアートやバイオアートには、そもそもパフォーマンス的な要素が内包されている。イエンス・ハウザーは「マイクロパフォーマンスティビティ」において、細胞レベルの動きや反応など、ミクロなスケールにおいてもパフォーマンスとしての側面を見出している。人間というメゾスコピックなスケールでも人間によるものでもない、人間を超えた（モア・ザン・ヒューマン）パフォーマンスティビティのあり方である。

現代の観測技術やデータ可視化技術によって、宇宙の

起源から連綿と続くミクロ・マクロのスケールで展開しているプロセス自体をパフォーマンスとみなすことが、かつてなく可能になっている。そこでは人間と非人間、生命と非生命、知性を持つものと持たないものというような分断は有効ではないだろう。ボイスにおけるエネルギーの流動、私の追求する「情報フロー」は、まさしくパフォーマンスとしての、ミクロ／マクロスケールを超えた世界の様態に関わるものとしてある。

そこでは支配するものもされるものも、善悪もない。人間の意図や人知を超えて、宇宙は展開し続ける。人間はそのなかに投げ込まれた束の間の存在でしかないが、科学・技術とともに省察力を持つものとしてある。そのような私たちが、脱人間中心的で「モア・ザン・ヒューマン」的な情報のフローの只中で、様々な事物や現象と感応しながら生を営み行動していくこと。そのような世界では生命と非生命を超えたエコゾフィーと平和が自ずと稼働するのではないか。人間は宇宙の歴史においてエフェメラルな存在だが、私たちが謙虚に世界と関係し自身を省察しながら生きることが、宇宙に何らかのポジティブな影響を及ぼすのではと筆者は信じて、そして生きている。

*本原稿は、岐阜おおがきビエンナーレ2021 国際シンポジウム「L I F —— E ! ?」の発表における事後サマリーであり、執筆にあたって以下の文献を参照した。

・四方 幸子、(2021-2022). Ecosophie Future . HILLS LIFE #4-9. <https://hillslife.jp/series/ecosophic-future/dialogue-place-of-light/>

・四方 幸子、奥野 克彦（聞き手）、(2022/2/18). マルチスピーシーズとアートの未来. 似文社. <http://www.ibunsha.co.jp/contents/multispecies02/>

*筆者が関わった作品については、Webサイトを参照。<http://yukikoshikata.com/curating/>

注

[1] フェリックス・ガタリが『三つのエコロジー』（平凡社、1991、原著：1989）において提唱した「エコゾフィー」（環境・精神・社会におけるエコロジー）。

[2] 東京グランギニョル Endless Art : M.M.M. SKIN（元東京グランギニョル）（2015/9/10）<https://keikotoendlessart.blogspot.com/2015/09/mmm-skin.html>

[3] 村山 斉（2010）. 宇宙は何でできているのか 素粒子物理学で解く宇宙の謎 幻冬社新書

[4] 諏訪・ハケ岳地域特有の自然に根ざし古代から連綿と続く文化や精神性から学び、アーティストの滞在により新たな文化芸術を育んで行くために一般社団法人ダイアローグプレイスが開始したアートコモンズとしてのコミュニティ。その象徴とし

- て、周囲を反映する大きな鏡が自然のなかに設置された「光の対話場」がある。フォーラムの映像記録は以下で公開中。
一般社団法人ダイアログプレイス。 <https://www.dialogueplace.org/>
- [5] 渡辺は「7,000本のオーク」のスタンプは、木の根が石につながっていると述べている。渡辺 真也 (2020). ユーラシアを探して ヨーゼフ・ボイスとナムジュン・パイク 三元社
- [6] 梶山 林継 (2018/10/21). 祭祀の中の勾玉 (展覧会関連講演) 松浦武四郎展 (2018/9/24~12/8) 静嘉堂文庫美術館 <https://www.seikado.or.jp/exhibition/2018004.html>
- [7] 奥野 克巳 (2022). 絡まり合う生命 人間を超えた人類学 亜紀書房
- [8] 今西 錦司 (1941). 生物の世界 弘文堂書房
- [9] Hoffmeyer, J. (1993). *En snegl på vejen: Betydningens naturhistorie*. Rosinante/Munksgaard. (ホフマイヤー, J. 松野 孝一郎, 高原 美規 (訳) (1999). 生命記号論: 宇宙の意味と表象 青土社)
- [10] Kohn, E. (2013) *How forests think : toward an anthropology beyond the human*. University of California Press . (コーン, E. (2016). 奥野 克巳, 近藤 宏 (監訳). 森は考える——人間的なものを越えた人類学—— 亜紀書房)
- [11] *Electronic Civil Disobedience & Other Unpopular Ideas* (1996), *Flesh Machine: Cyborgs, Designer Babies, & New Eugenic Consciousness* (1998), *The Molecular Invasion* (2002) など。
- [12] CyGnet (Cyber Gallery Network) は、資生堂が開設していたネット上のギャラリー (1998-2003)。筆者と資生堂担当者が委嘱作品をキュレーションした。「tyrell.hungary」は、筆者キュレーションの第一弾。再現動画 (2018年度文化庁の助成枠): <https://drive.google.com/file/d/1UV3zgQhLIDXTsM6fi2dTINzl0UYOaEXB/view?usp=sharing>
- [13] Fukuyama, F. (2002). *Our posthuman future : consequences of the biotechnology revolution*. Farrar, Straus and Giroux. (フクヤマ, F., 鈴木 淑美 (訳) (2002). 人間の終わりーバイオテクノロジーはなぜ危険か ダイアモンド社)
- [14] アートラボ第10回企画展 (2000/10/28~11/6). ヒルサイドプラザ。キュレーター: 阿部一直, 四方幸子, co-produced with キヤノン・アートラボ。
- [15] ミッションG: 地球を知覚せよ! 展 (2009/5/16~2010/2/28). NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]
- [16] カールステン・ニコライ+マルコ・ベリハン「polar m [ポーラーエム]」展 (2010/11/13~2011/2/6). 山口情報芸術センター [YCAM]. キュレーター: 阿部一直, 四方幸子。
- [17] 人のDNAを抽出, DNAマニフォールドアルゴリズム (生命自体に変異を起こさせることなく塩基配列のみ組換え) によりコード化した木の内側に保存することで制作。筆者が「オープン・ネイチャー | 情報としての自然が開くもの」展 (2005) で日本初紹介。
- [18] 2016年9月17日~11月20日茨城県北の6市町という広域で開催された芸術祭。地域の協力とともに成功を収めたが、知事の交代により1回で終了。Webサイトも削除された。
- [19] "aPrayer: まだ見ぬ つくれられしものたちの慰霊" by metaPhorest (2016-) https://www.youtube.com/watch?v=TxXl19S_ono
- [20] 土/compost <https://mhers.pb.studio/compost>
- [21] 福島県内の除染土を仕分け30年間貯蔵する施設で、福島第一原子力発電所の北 (双葉町) と南 (大熊町) にある。その後は県外に永久貯蔵される予定だが、場所は未決定。
- [22] 「moids」(音の反応ドミノ), 「鈴」(環境放射線), 「を超える為の余白」(泡), 「コンポスト」(呼吸), 「無主物」(湿度), 「空気の研究」(気流) など。
- [23] 四方 幸子. (2021 September). 「螺旋の思考 (The Spiral Thoughts)」(1/2) —ミクロ/マクロ, 生命そして宇宙のつながり HILLS LIFE連載「Ecosophic Future」#7 <https://hillslife.jp/series/ecosophic-future/the-spiral-thoughts/>
- [24] ハラウエイ, D., 高橋 さきの (訳) (2017). 人新世, 資本新世, 植民新世, クトゥルー新世 類縁関係をつくる. 現代思想 (特集: 「人新世」), 2017年12月号.

- [25] 石倉 敏明 (2020). 藤浩志×石倉敏明「ヒューマンスケールを超える資源と物語」, 美術手帖 (特集:「新しいエコロジー」), 2020年6月号.

四方幸子 (Yukiko SHIKATA)

キュレーター／批評家。美術評論家連盟(AICA Japan) 会長。「対話と創造の森」アーティスティックディレクター。多摩美術大学・東京造形大学客員教授, 武蔵野美術大学・情報科学芸術大学院大学 (IAMAS)・國學院大学大学院非常勤講師。「情報フロー」から諸領域を横断する活動を展開。1990年代よりキャノン・アートラボ (1990-2001), 森美術館 (2002-04), NTTインターコミュニケーション・センター [ICC] (2004-10) と並行し, インディペンデントで先進的な展覧会やプロジェクトを多く実現。2020年以降の仕事に美術評論家連盟2020シンポジウム (実行委員長), MMFS2020 (ディレクター), 「ForkingPiraGene」 (共同キュレーター, C-Lab台北), ALTERNATIVE KYOTO2021キックオフ・フォーラム「想像力としての<資本>」 (企画&モデレーション, 2021), フォーラム「精神としてのエネルギー | 石・水・森・人」 (企画&モデレーション, 一社ダイアログプレイス, 2021)「EIR (エナジー・イン・ルーラル)」 (共同キュレーター, 国際芸術センター青森+ Liminaria, 2021-2023), 「STUDY: 大阪関西国際芸術祭」 (共同キュレーター, 2022, 2023) など。国内外の審査員を歴任。共著多数。2023年に初単著刊行。

yukikoshikata.com